

2022年度

全学部統一選抜

国語総合

(古文選択可・漢文を除く)

[60 分]

〔共通問題〕

〔一〕〔現代文〕次の文章を読み、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、文章の上に行数を付してある。

「日本人は英語ができない」とよく言われます。できない理由はひとつではないのですが、まず第一に重要な障害になっているのが、英語と日本語の間の距離です。つまり、学習者の母語と学習対象となる言語が似ていれば似ているほど、つまり距離が近ければ近いほど、全体としては、学習しやすいのです。日本語と英語は、系統的に異なっており、たとえば、英語と同じインドヨーロッパ語族に属する言語を母語とする学習者に比べると、日本人学習者はかなりハンディキャップを負っていると云っていいでしょう。このように、言語と言語がどの程度似通っているか、というガイネンは言語間の距離と呼ばれています。

これは、方言話者がいわゆる標準語を習得することは、それほど難しくないことを考えれば、納得がいきます。実際、多くの日本語の方言は標準語（東京方言）とはけっこう違っていますが、基本的なところでは似通っているので、多くの方言話者は東京方言とのバイリンガル（より正確に言えば「二方言話者」）になります。

常識的には別の言語ととらえられている言語でも、じつはかなり似ている場合があります。そのような場合、方言を習得するのと大差がない。たとえば、同じロマンス語（ラテン系の言語）に属するスペイン語とポルトガル語は、語彙も文法も非常に似ているので、お互いの言語を全く知らなくても、何とかコミュニケーションがとれてしまいます。このように母語と外国語の間の距離が近い場合は、第二言語として学習することも楽なことは言うまでもありません。

余談になりますが、じつは「言語」と「方言」の区別というのは科学的には線引きが不可能なのです。ある言語の方言同士がどのくらい似ているか違っているか、というのを決める基準に絶対なものはないからです。たとえば、津軽弁しか話さない人と鹿児島弁しか話さない人との間では意思疎通は難しいですが、スペイン語しか話さない人とポルトガル語しか話さない人の間の理解は可能です。つまり、方言同士の方が意思疎通が難しく、別の言語同士の方がやさしい、ということさえあるのです。ある言語の変種が別の言語か、方言ととらえられるかは、実際は様々な要因、特に政治的要因で決まります。いい例が旧ユーゴスラビアの言語セルボクロアチア語で、以前はひとつの言語とされていました。現在では、国家分裂により、セルビア語とクロアチア語に分かれています。

さて、日本人にとって英語が難しいのと同様に、その逆、つまり、アメリカ人の学習者が日本語を学習するのも容易ではありません。それに比べて、アメリカ人がスペイン語とかフランス語を学習するのはずっと楽です。アメリカ国務省の外交官養成キカンである Foreign Service Institute の一九八五年の資料によると、アメリカ人が日本語をかなりのレベルで使えるようになるのには、アメリカ人がスペイン語をかなりの

レベルで使えるようになる時間の倍以上かかるといふことです。

もちろん、これは教える側の経験にもとづいたオオザツバなものです。ちなみに、二〇〇二年の国防省外国語学校では、アメリカ英語の母語話者にとつての難易レベルによつて、諸言語を四段階に分けています。

25 正確な難易度の確定はいまのところ難しいようですが、ある母語の話者にとつてどの言語が難しいかやさしいかというのは、ある程度予測がつき、それは言語の距離によつて決まる、ということが言えます。

韓国ドラマのブームで韓国語を学習する人が増えたようですが、日本人にとつて、学びやすい言語は韓国語です。日本語の起源はまだまだはっきりせず、アルタイ語族だという説、オーストロネシア語族だという説、両者の混合であるという説など、シヨセツ(エ)があります。最も似ている言語は韓国(朝鮮)語でしょう。文法が非常によく似ています。韓国語なら、英語よりも少ない学習時間である程度使えるようになるでしょう。それから、日本語には漢語が多数はいつているので中国語とは語彙(イ)が似ています。音声、文法はずいぶん違っていますが、多くの漢字を共有しているため、語彙の習得がかなり楽になることが予測されます。ただし、これらの予測について、実際日本人にとつて韓国語、中国語がやさしいのかどうかを比較したジツシヨウ実験(オ)は、まだありません。

カーネギーメロン大学の甲田慶子の研究に、その逆を調べたものがあります。日本語学習者を韓国語、中国語、英語の三つの母語グループに分けてその習得状況を調べたところ、初期の段階ですでに、英語話者は韓国語話者・中国語話者に差をつけられており、しかもこの差は学習がすすみ中級、上級と上がるにしたがつてさらに広がる、ということでした。母語と外国語との距離は、やはり学習難易度に非常に強い影響をあてるのです。

このような、第二言語習得(SLA)における母語の影響は「言語転移」と呼ばれています。つまり、学習者の母語の知識が第二言語に転移するのです。これは、第二言語習得のあらゆる場面でカンサツ(カ)することができます。発音、単語、文法、文化など、様々な形で母語の影響が現れます。

40 さて、転移という現象は、言語習得にかぎらず、学習された他のスキルについてもカンサツされます。たとえば野球をやっていた人は、ゴルフを始める時に野球のスイング(たとえば、低めのボールを打つ時の体の動き)が、意識的にせよ、無意識的にせよ、出てきます。

筆者も、日本と同じに車が左側通行のオーストラリアで四カ月運転した後で、その逆のアメリカに戻って初めて運転した時に、サセツ(キ)で反対側の車線に入ってしまうという恐ろしい経験をしたことがあります。イギリスも車は左側通行で、知り合いのイギリス人は、アメリカで道を歩いてオウダン(ク)する時に、車が来ないのを確認したのに、車にはねられたそうです。確認したのは、反対側だったのです。

45 このように、**I**に転移する、というのは日常生活のあらゆる場面で見られます。そして、それは何度も何度も繰り返して行つたため自動的にになったものほど強いようです。

【例文】 When he came back, I will talk to him.
(彼が帰って来たら、話すよ。)

第二言語習得の例を見てみましょう。たとえば、日本語にはvの音はありませんから、日本人は英語のvの音を発音する時には、それに近い、bで代用してしまいます。oやaをオーバーと言いついてしまふのです。最近では、このvの音を日本語にとりこもうという動きも見られ、たとえば競馬の世界では一〇年以上前から馬の名前にvの音をヴで表すことが認められています。しかし、ネオユニヴァースという馬の名を、わざわざ上の歯を下唇に触れさせて、vで発音する人はいません。みなbで代用して、ネオユニバースと発音しています。

文法(文)コウモクについても同様で、過去形の使用で、上の【例文】のような間違いが英語をかなり話せる日本人にもよく見られます。ここは、未来のことなので、過去形を使うのはおかしいのですが(正しくはcomes)日本語で無意識のうちに考えているのでしようか、^(B)「来た」という形がcameという過去形を呼び起こしてしまうようです。

55 まあ、当然のことですが、自動化した行動を変えることは難しく、それに近い新しい行動をしようとすると、すでに持っている知識、スキルなどが転移する、というのは人間の行動の基本的原則であり、言語行動も同様なわけです。

しかし、言語転移が常に悪いわけではありません。ここで見た二つの例では、母語の影響の結果として、間違った言語形式になっています。この場合は、「負の転移」もしくは「干渉」と言われます。ところが、英語でも日本語でも、同じような形式を使う場合だったら、そのまま訳せばいいわけです。たとえば、日本語の過去形「た」は、多くの場合、英語の過去形に対応するので、^(C)どちらの場合も心理的プロセスは同じですが、結果が正しい場合と間違になる場合が出てくるのです。そして、それは、単なる偶然、というては何ですが、学習者の母語と、第二言語がどういう対応になっているかによって決まるわけです。

前に、日本人が韓国語を学ぶのはやさしい、という話をしましたが、それは日本語と韓国語がよく似ているので、結果として「正の転移」になることが多いからです。あまり深く考えずに直訳しておけば、だいたいうまくいきます。言いかえれば、母語と似た言語を学習する場合は、^(C)正の転移になる場合が多いということです。

言語でない、その他のスキルを例に考えてみましょう。筆者が高校教員をしていたころの話ですが、バスケット部の生徒がよくハンドボール部の試合にかり出されていました。バスケットボールとハンドボールは、必要とされる動きが似ているため、このようなことが可能になるわけです。つまり、正の転移が多いのです。日本人が韓国語を学ぶようなものです。一方、サッカー部の生徒をハンドボールの試合に出してもあまり役にたたないでしょう。これは日本人が英語を学ぶのに似ています。正の転移があまりない。

70 しかし、バスケットの試合にハンドボール部の生徒がかり出される、という話は、聞いたことがありません。正の転移が「全体としては」多いはずなのに、なぜでしょう。じつは、ハンドボールでは、ボールを持って三歩まで歩けるのですが、バスケットボールでは、二歩しか歩けな

いのです。つまり、自分の慣れたことをやると、それでルール違反になってしまうのです。これが、負の転移で、しかもこの場合は、決定的なものです。

75 ここで重要なのは、正の転移になるか、負の転移になるかは、二つのルールのシステムの対応がどうなっているか、というまさに偶然に左右されるということです。第二言語学習の場合も、母語のルールと第二言語のルールの対応がどうなっているかによって正の転移になったり、負の転移になったりする、ということですが、転移、というプロセスについては、正の場合も、負の場合も、同じような心的メカニズムが働いているのです。

80 母語と第二言語の距離が近ければ、学習しているうちに、直訳しても大丈夫だということに学習者はふつう気づきます。そのため、第一言語と第二言語の距離が近いほど、第一言語の影響が出やすくなります。もちろん、言語間の距離は、学習を始める前に知っている場合もあれば、学習開始後に気づく場合もあるでしょう。日本語と韓国語が似ている、と知らないで韓国語学習を始めても、すぐにそのことに気づいて、正の転移を最大限活用するようになるでしょう。

85 ただし、二つの言語が似ていることから、^(D)転移があまり強くなると、逆に違っているところの間違いがなかなかなくなるという問題もおこります。たとえば、ある研究では、アルファベット言語を母語に持つ学習者と、そうでない学習者を比べたところ、アルファベット言語の学習者の方が英語のつづりの間違いが相対的に多い、という傾向が出ています。母語の影響についてまとめると、次のようになります。

母語と第二言語の距離が近いほど

(1) II がおこりやすく、

(2) II は III となり、全体として学習が容易になるが、

(3) 母語と第二言語が IV 部分については間違いがなくなりにくい。

(白井恭弘『外国語学習の科学——第二言語習得論とは何か』による)

問一 傍線部(ア)～(コ)のカタカナに該当する漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は 1 ～ 10。

(ア) ガイネン

- ① 差別的な扱いにフンガイする
- ② ダンガイ裁判が行われる
- ③ ガイ口樹を伐採する
- ④ 費用をガイサンする
- ⑤ 城のガイカクを見る

1

(イ) キカン

- ① キシユツの問題を発見する
- ② キウンが熟する
- ③ キブツ損壊の罪に問われる
- ④ 家のキコウ式を行う
- ⑤ キチヨウ講演を行う

2

(ウ) オオザツパ

- ① ハランに満ちた人生
- ② 大体の内容をハアクする
- ③ 全国大会をセイハする
- ④ 本質をカツパする
- ⑤ セツパ詰まった状態

3

(エ) ショセツ

4

- ① 解決のショに就く
- ② ショヨの条件
- ③ ショシ貫徹
- ④ ショセイ術に長ける
- ⑤ ショハンの事情を考慮する

(オ) ジツシヨウ

5

- ① 文献により時代コウシヨウする
- ② 紫綬しじゆホウシヨウを受ける
- ③ 彼はキシヨウが荒い
- ④ 不正のオンシヨウとなる
- ⑤ ケイシヨウの地を訪れる

(カ) カンサツ

6

- ① 煙をカンチする
- ② カンケンの限り見あたらない
- ③ 様々な状況をカンアンする
- ④ 人生をタツカンする
- ⑤ 部活にカンユウする

(キ) サセツ

7

- ① 作品のコウセツは問わない
- ② セツソウのない人
- ③ 予算セツシヨウを行う
- ④ 期限がセツパクする
- ⑤ 知識はそこにホウセツされている

(ク) オウダン

8

- ① 責任者をダンザイする
- ② 結婚話をハダンにする
- ③ ベツダンの配慮をする
- ④ 日本代表のカイダン式を行う
- ⑤ 世間からシダンされる

(ケ) コウモク

9

- ① ネンコウ序列の賃金制度
- ② 基本的人権に関する憲法のジヨウコウ
- ③ 景気回復のチヨウコウが見られる
- ④ 上級裁判所にコウコクする
- ⑤ 条約のタイコウを定める

(コ) アットウ

10

- ① 相手の立場をネントウに置く
- ② レットウ感を持つ
- ③ 敵をソウトウする
- ④ 不法トウキをなくそう
- ⑤ 建物がトウカイする

問二 傍線部(A)「たとえば、津軽弁しか話さない人と鹿児島弁しか話さない人との間では意思疎通は難しいですが、スペイン語しか話さない人とポルトガル語しか話さない人の間の理解は可能です。」という例示から言えることとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 11。

- ① 異なる国の言語であっても、政治的に親しい関係にさえあれば、同じ国に属する別の方言同士よりも意思疎通は比較的容易である。
- ② 同じ言語か別の言語かという違いに関係なく、語彙や文法などが似通っているかどうかによって、意思疎通しやすいかどうかが決まる。
- ③ 異なる言語でも言語の距離が近いと意思疎通が可能だが、日本語の方言は距離が遠いため、言語習得の面でハンディキャップがある。
- ④ 言語の学習という面では、「言語」か「方言」かの違いではなく、母語と学習する言語の言語的特徴の違いが学習の容易さに関わる。
- ⑤ 「言語」か「方言」かの違いは、その言語がどの国に属するかという基準ではなく、言語同士の距離の近さを基準に決められる。

問三 空欄 I に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 12。

- ① 習慣化した行動がそれと似た行動をするとき
- ② 意識的な行動が無意識的な行動に変化するとき
- ③ 不用意な行動がその行動をしてはいけないとき
- ④ 自動化した行動がその行動を意識的に真似するとき
- ⑤ 無意識の行動が意識して行動する必要のあるとき

問四 Yさんは、傍線部(B)「来た」という形がcameという過去形を呼び起こしてしまっ」とはどういうことを考えるために、次の【国語辞典】の内容を調べた。【国語辞典】の内容をふまえると、傍線部(B)についてどのように説明することができるか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 13。

【国語辞典】(明鏡国語辞典)第二版からの抜粋)

<p>た〔助動詞〕</p> <p>① 完了</p> <p>② 過去</p> <p>③ 以前から心にあるものごとの実現を表す</p>	<p>たら〔接続助詞〕</p> <p>① 未実現の事柄を仮定して、条件として示す。</p> <p>② 偶然起こる事柄のきっかけを表す。</p> <p>③ すでに実現していることを前提として示す。</p>
---	---

- ① 「来たたら」の「た」を動作や状態が終わった意味を示す「完了」の意味の助動詞としてとらえなければならないが、帰るという動作の意味が含まれない「過去」の意味の助動詞「た」としてとらえた可能性がある。
- ② 「来たたら」の「た」を「以前から心にあるものごとの実現を表す」意味の助動詞としてとらえなければならないが、「すでに実現していることを前提として示す」意味の接続助詞「たら」としてとらえた可能性がある。
- ③ 「来たたら」の「たら」を「未実現の事柄を仮定して、条件として示す」意味の接続助詞としてとらえなければならないが、「た」に含まれる「た」の部分を取りだして「過去」の助動詞としてとらえた可能性がある。
- ④ 「来たたら」の「たら」を「偶然起こる事柄のきっかけを表す」意味の接続助詞としてとらえなければならないが、「た」の部分から「以前から心にあるものごとの実現を表す」意味の助動詞をイメージした可能性がある。
- ⑤ 「来たたら」の「たら」を「偶然起こる事柄のきっかけを表す」意味の接続助詞としてとらえなければならないが、「すでに実現していることを前提として示す」意味として取り間違えた可能性がある。

問五 傍線部(C)「心理的プロセス」の内容として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 14。

- ① 外国語を学習する際に、母語の言語形式との違いを意識しすぎると深く考えなくなる点。
- ② 外国語を学習したり用いたりする時に、母語の習得の中で得た知識やスキルを利用する点。
- ③ 外国語を学習し始める時点で、その外国語の言語形式が母語のそれと似ていることを願う点。
- ④ 外国語を学習して習得したとしても、自身の行動様式は容易には変わらないという点。
- ⑤ 外国語を学習している人が母語を使う際に、外国語の言語形式を採り入れようとする点。

問六 66行目～73行目で述べられている例示から言えることとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 15。

- ① バスケツトボールとハンドボールの例は、特徴が似ている二つの言語があつたときその特徴を利用することによって学習が効果的になる反面、その特徴を利用することによって、学習が阻害されることもあることを示している。
- ② バスケツトボールとハンドボールの例は、母語とは異なる言語を学習する際にはそれぞれの言語の特徴を十分にとらえる必要がある、そのとらえ方によって、学習の効果が正にも負にもなりうるということを示している。
- ③ バスケツトボールとハンドボールの例は、言語Aと言語Bの相違点を利用することで学習が効果的になる場合がある一方、言語Aと言語Bの類似点を利用することは学習の効果が妨げにしかないということを示している。
- ④ バスケツトボールとハンドボールの例は、表面上の特徴を学習に利用することが有効である一方、その言語をより深く理解することによって、その表面的特徴がかえって学習上の邪魔になる場合があるということを示している。
- ⑤ バスケツトボールとハンドボールの例は、言語Aを学習するのに言語Bの言語的特徴が役立つからといって、言語Bを学習するときに言語Aの言語的特徴が役立つとは限らず、むしろ害となることもあるということを示している。

問七 傍線部(D)「転移があまり強くなると、逆に違っているとこの間違いがなかなかなくなるらない、という問題も起こります」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 16。

- ① 学ぼうとしている言語の習得よりも母語の習得の方がはるかに容易であることにより、現在学習している言語についても容易に習得できると考えて取り組みがおろそかになる傾向にあるから。
- ② 母語と学習している言語の言語的・文法的な違いについて意識的になりにくいことにより、両者の似ている点を積極的に利用していうとする意識も希薄になる傾向にあるから。
- ③ 学習しようとしている言語と母語で言語的・文法的な側面が同じものだと考えていることにより、学習している言語に関して誤りがあったとしてもそれをすぐに認めようとしないう傾向にあるから。
- ④ 学ぼうとしている言語の学習量よりも母語に関する学習量の方がはるかに多いことにより、母語以外の言語の学習においても母語に関する学習の成果をふまえてしまう傾向にあるから。
- ⑤ 母語と学習しようとしている言語の特徴が似ていることにより、両者を混同し母語に関する知識や記憶をもとに自分が学習している言語の使い方の適否を判断してしまいう傾向にあるから。

問八 空欄 II IV に入る語として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は、IIは 17・IIIは 18・IVは 19。

- ① 違っている
- ② 負の転移
- ③ 近い
- ④ 正の転移
- ⑤ 基本的原則
- ⑥ 転移
- ⑦ システム
- ⑧ 同じ
- ⑨ 代用

問九 Yさんは、本文全体の内容を次の「フート」にまとめた。「フート」の空欄 ①、②、③に入る言葉として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は、①は 20、②は 21、③は 22。

フート

<p>① 1行目～36行目…… ①</p>	<p>(1) 1行目～18行目……言語習得や意思疎通の難易の背景</p> <p>(2) 19行目～26行目……アメリカ人が諸言語を習得する際の難易の背景</p> <p>(3) 27行目～36行目……日本人が韓国語や中国語を学びやすい背景</p>
<p>② 37行目～84行目……言語転移</p>	<p>(1) 37行目～56行目…… ②</p> <p>(2) 57行目～84行目…… ③</p>
<p>③ 85行目～最後……全体のまとめ</p>	

- | | |
|--|--|
| <p>① 行動の自動化に伴う負の側面</p> <p>③ 言語習得のルールづくり</p> <p>⑤ 言語間の距離の心的メカニズム</p> <p>⑦ アルファベット言語学習者の特徴</p> | <p>② 転移の良し悪しの背景</p> <p>④ 学習難易度と政治的要因</p> <p>⑥ 第二言語習得における間違いの特徴</p> <p>⑧ 言語とその他の行動との相違点</p> |
|--|--|

〔選択問題〕〈現代文〉か〈古文〉かの、どちらかを選択して、一方のみを答えなさい。

〔二〕〈現代文〉次の文章は、墓地のあり方が変化しつつあった一九九三年に書かれたものである。これを読み、後の問いに答えなさい。

墓地は、どのような意味をもった空間であり、どのような場所に設けられたのであろうか。また、人々は墓にたいしてどのようなイメージをもっているのであろうか。

一九八七（昭和六十二）年に東京都がおこなった「都民の霊園に関する意識調査」では「死者をしのぶところ」七三・六パーセント、「厳かなところ」四一・九パーセント、「明るい公園のようなところ」二四・二パーセント、「単なる埋葬の場」一一・二パーセント、「暗く不気味なところ」七・四パーセントとなっている（複数回答）。

現在では、多くの人々が墓地を死者をしのぶところと答えており、墓地にたいして暗いイメージをもつ人々が少なくなっている。もちろん、この調査結果は東京都に居住する人々を対象とした意識調査であり、近代的な霊園をイメージして回答した人々が多いことを割り引きして考えなければならぬ。

それにしても、現在では墓地を「死者をしのぶところ」と考える人々が全体の四分の三にもなっているのである。彼らが「死者をしのぶ」という場合、彼らにとってその死者は縁もゆかりもない人々ではない。その死者は自分の親しい人たちであり、多くの場合、自分と生活をともにした家族の一員であった人々であろう。

墓地はそのような親しい死者を⁽¹⁾厳かにしのぶ場所なのである。また、現状の墓地の認識については「明るい公園のようなところ」とする人々が四分の一近くに達している。人々は墓地を、不気味な死霊がさまよう場所ではなく、親しい死者と再会をする舞台にふさわしい〈明るい公園のような〉空間であると、意識するようになった。

また、この調査では、一般に望ましい墓地の立地環境についても、「自然に恵まれた郊外」五八・七パーセント、「居住している地域の近く」二二・一パーセント、「市街地の緑地に隣接したところ」一八・三パーセントと、墓地を a 空間として社会から隔離する意識も希薄になってきている。ここでも、墓地を「死穢の場」として忌避するという意識は希薄になっていることがわかる。

明るい公園のような場所であることを望み、他方では厳かな場所であることを望み、さらに社会から隔離されたいことを望む。このような墓地空間は、親しい死者との再会の舞台であるだけでなく、⁽²⁾〈私〉の「死後の住処」にもふさわしい空間なのである。

都市近郊の近代的な霊園のなかでも、「〇〇家之墓」と刻まれた〈家墓〉を数多くみいだすことができる。「〇〇家之墓」と刻まれた〈家墓〉の建立は、明治時代になり、火葬の普及や墓地拡張や新設の制限をつうじて普及しはじめるものであり、この〈家墓〉をもって日本の伝統的な

墳墓の形態であるとは言えない。

もつとも、墳墓が〈家墓〉の形態をとるのが近代日本の産物であったとしても、家を単位とした墓地の形成は古くからみられたし、先祖代々が同じ墓地に眠るといふ枠組みの延長に〈家墓〉が形成されたものである限り、この〈家墓〉は伝統的な家の象徴として機能し、家的伝統を b 表現するものであると言えるであろう。

そして、この〈家墓〉が、近代的な霊園のなかでも再生産されていった。それは、公園化した墓地のなかで墓地景観を保つという墓地造成上の問題から、また墓地不足を背景とした墓地区画の面積の制限という、外部的な要因にも基づいている。つまり、一つの墓地区画のなかには一つの納骨施設（＝墳墓）しか建設することができないことが多いからである。したがって、墳墓は合葬を前提とした〈家墓〉にならざるをえない。墓地経営のあり方が、〈家墓〉を規定してきたのである。

しかし、〈家墓〉についての意識は確実に変化していった。その変化は、生前に自分がある墓を手にいれようとする人々が多くなったことに表現される。生前墓（＝逆修墓^{さきうしゅうぼ}）は必ずしも現代的な現象ではないとしても、現在の民間霊園の墓地購入のうち、生前に自己の墓を購入するのが全体の六割から八割におよぶとされている。

つまり、現在、墓地を手にいれようとする多くの人々は、死者のためではなく、自分が「死後の住処」を確保するためにそれをおこなうのである。彼らは、当然〈私〉が先祖の墓にはいることを期待するのではなく、〈私〉が子孫とともにいることを期待しているのである。その「死後の住処」に〈私〉を愛してくれた人々が詣り、この住処に〈私〉がかつて一緒に暮らした家族が住んでくれることを期待するのである。

さらに、墳墓（＝石塔）に刻む言葉も変化してきている。かつて「〇〇家之墓」のように家名を刻んだ〈家墓〉から、「寂」「浄」「愛」「空」「夢」「憩」「和」など抽象的な言葉を墓碑に刻むケースも多い。もちろん、このような言葉とともに〈姓〉を刻むケースが多いとしても、ここには祖先とともに眠る、あるいは祖先祭祀^{さいし}の対象としての墳墓という意識が次第に希薄になってきていることが窺^{うかが}える。家族との再会の舞台としての墓地には、かつての人々から隔離した「死穢の場」としてのイメージはない。さらに、墓地は先祖を祭祀するための空間であるという意識にも変化の兆しが見られる。

このような墓地イメージの変化を考えると、フランスの社会史家であるP・アリエスの考察が参考になるかもしれない。十八世紀の後半になって、ヨーロッパでは公衆衛生の観点から都市内の墓地が批判の俎^{そじょう}上に載せられ、十八世紀末から十九世紀にかけて都市郊外に新しい墓地の建設がはじまった。この意味では、この時期が、ヨーロッパの墓地の歴史にとって、大きな転換期であったともいえる。しかし、この転換は墓地形態の変化にとどまらなかった。教区教会^{せうく}から分離された墓地に、人々は参拝しはじめたのである。

この問題をアリエスは、「死を前にしての態度」（＝「心性の変化」）としてとらえた。中世においては、死者は教会に委ねられたというより、教会に捨てられた、とアリエスはいう。中世後半になると、死者たちは自己の個性を主張するようになり（＝「自己の死」）、十四、五世紀に

なると、上層階層において家族用の礼拝所が設けられるようになる。しかし、ここが「死者の思い出」を確かめる場であるというより、まだ「名声を保つ配慮」のほうが必要であった、とする。

その後も、死にたいする態度の変化は確実に進んでいた。十九世紀以降になると、自己の死にはそれほどの関心を示さなくなり、特定の他者（家族）へ愛情を向けることによって「死とともに生きる」ことに満足をみいだすようになる（Ⅱ「他者の死」）。この段階で、墓地はこの世で愛する者たちと再会をする舞台として用意されることになる、アリエスは論じている（『死と歴史』）。

家族とともに埋葬される傾向は、現在に至るまでヨーロッパ社会では続いている。二十世紀の後半になって、これまでとは異なった新たな傾向がみられるにしても、ヨーロッパ各地の墓地では〈家族墓〉が今なお一つの大きな流れを形成している。

アリエスの「死の文化史」は、祖先祭祀の観念が欠如したヨーロッパ（Ⅱキリスト教社会）の〈死〉と〈墓〉を問題としたものであるが、日本の社会にも部分的にあてはまる。ヨーロッパでは教会から墓地が分離されることによって、近代市民社会の墓地が形成された。この墓地はキリスト教から切り離されたものではないが、死者が宗教上の論理によってではなく、家族とのつながりのなかで埋葬されることを望むのである。日本社会では〈家族的なつながり〉のなかで埋葬されることは、江戸時代以来庶民階層のなかでも一般的な現象になっていった。もともと、この〈家族的なつながり〉は、家の枠組みを基礎にしたものであって、先祖代々の墓地に〈先祖〉とともに埋葬されることを期待したものであった。

この枠組みが払拭されたとはいえないが、現在の新しい墓地のなかで徐々に変化してきた。先祖とともに祀^{まつ}られるよりも、死者は、生前親しかった人々、自分とともに暮らした妻や子供たちと一緒に葬られることを望み、墓地は愛する者を失った家族がその死者を追悼する場になったのである。死者は生前に自らが用意した墓地に埋葬され、そこで生前に愛した人々との再会を望むのである。

〈家族的なつながり〉のなかで近代的な墓地が形成されていく³⁾というのは、日本とヨーロッパではその内容において差異があるとしても、可視的には共通の現象として展開するのである。

（森謙二『墓と葬送の社会史』による）

（注1）死穢……死のけがれ。死者や死体をけがれたものとして忌避する考え方。

（注2）教区教会……その教区（宗教活動のため便宜的に設定された区域）の中で、拠点となる教会。

問一 傍線部(Ⅰ)の「厳かにしのぶ」における「厳か」は、どのような意味で使われているか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① ひっそりとして静かな様子
- ② 重々しくいかめしい様子
- ③ まがまがしくおそろしい様子
- ④ 荒々しく激しい様子
- ⑤ ひたむきで真面目な様子

問二 空欄 a・b に入る最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は ・。

- a
- ① 非現実的な
 - ② 非生産的な
 - ③ 非科学的な
 - ④ 非人道的な
 - ⑤ 非日常的な

- b
- ① 知的に
 - ② 美的に
 - ③ 私的に
 - ④ 端的に
 - ⑤ 劇的に

問三 傍線部(2)「〈私〉の「死後の住処」にもふさわしい空間」であるのはなぜか。その理由として適切でないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 家族や子孫が、死後の〈私〉を気軽に訪れられる空間だから。
- ② 生前厳かにしのんできた先祖と、死後一緒にいられる空間だから。
- ③ いずれ家族や子孫も同じ墓に入ることを、期待できる空間だから。
- ④ 死後も〈私〉が、社会から隔離されることのない空間だから。
- ⑤ 子孫たちが〈私〉を、先祖として祭祀するだけの空間ではないから。

問四 傍線部(3)「日本とヨーロッパではその内容において差異がある」のはなぜか。その理由として適切でないものを、次の中から二つ選び、番号で答えなさい。ただし、解答順は問わない。解答番号は ・ 。

- ① ヨーロッパ(キリスト教社会)では、家族や子孫による祖先祭祀が一般的ではなかったから。
- ② 日本では、家の枠組みに基づいた祖先祭祀が従来の墓地イメージを形成していたから。
- ③ ヨーロッパでは教区教会からの墓地の分離が、人々の墓地とのかかわり方に変化をもたらしたから。
- ④ 日本では公衆衛生上の問題が起きず、墓地の立地環境は昔から変化していないから。
- ⑤ ヨーロッパでは家族用の礼拝所を設けた上層階層から、墓地イメージの変化が始まったから。
- ⑥ 日本では、先祖代々が同じ墓地に入るといふ枠組みが古くから存在したから。

問五 本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 29。

- ① 望ましい墓地の立地環境として「自然に恵まれた郊外」を挙げた人が半数以上いたように、本文が書かれた頃の日本では墓地を生活空間から切り離そうとする意識が高まりつつあった。
- ② 日本では近代的な広い霊園が整備された結果、先祖代々が同じところに入るといふ伝統的な家墓が減少し、代わりに自分と身近な家族だけが入る新しい墓の形が生まれた。
- ③ 本文が書かれた頃の日本では、墓地は祖先祭祀の空間であるという意識が変化しつつあったが、近代的な霊園が整備されていない地方も都市部と同じ状況であったとは限らない。
- ④ 中世ヨーロッパにおいては、死者は教会が都市郊外に設置した墓地に埋葬されていたが、その墓地で家の枠組みに基づく祖先祭祀が行われることはまだ一般的ではなかった。
- ⑤ ヨーロッパでは十九世紀以降、愛する者たちと再会する舞台としての役割が墓地に求められ、そうした要望に応える形で教会から分離した墓地が用意されるようになった。

〔二〕 〈古文〉 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

平宣時朝臣、老の後、昔語りに、^(注)「最明寺入道、ある宵の間に呼ばれる事ありしに、^(A)「やがて」と申しながら、^(注)直垂のなくてとかくせしほどに、

又使ひ来たりて、「直垂などのさぶらはぬにや。^(X)夜なれば異様なりともとく」とありしかば、萎えたる直垂、内々のままにてまかりたりしに、

銚子に土器とりそへて持て出でて、「この酒をひとりたうべんがさうさうしければ、^(C)申しつるなり。^(注)肴こそなけれ、人はしづまりぬらん。^(Y)さり

ぬべきものやあると、いづくまでも求め給へ」とありしかば、^(注)脂燭さして、くまぐまをもとめし程に、台所の棚に、小土器に味噌の少しづきた

るを見出でて、「これぞ求め得て候ふ」と申ししかば、⁽²⁾「事足りなん」とて、心よく数献に及びて、興に入られ侍りき。⁽³⁾その世にはかくこそ侍り

しか」と申されき。

〔徒然草〕による

(注) 平宣時朝臣……北条宣時(一二三八～一三三三)。北条時頼の没後に、鎌倉幕府で執権に次ぐ役職である連署となる。

最明寺入道……北条時頼(一二二七～一二六三)。鎌倉時代中期の幕府執権。

直垂……武家の礼服。

肴……酒を飲むときに添えて食べる物。

脂燭さして……手持ちの灯りに火をともして。

問一 傍線部(A)～(C)の意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は

32。

30

(A) やがて

30

- ① いずれ近いうちにお伺いします
- ② すぐに参上致します
- ③ そのまま退出するでしょう
- ④ そのうちに退出したようです
- ⑤ ゆっくりさせて頂きます

(B) まかりたりしに

31

- ① 参上したところ
- ② 参上するならば
- ③ 退出しましたが
- ④ 召し上がるので
- ⑤ 車にお乗りになると

(C) さうびょうしければ

32

- ① 殺風景なので
- ② 騒がしかったが
- ③ すさまじかったが
- ④ 物足りなかったので
- ⑤ あまりにひどかったので

問二 二重傍線部 (X)・(Y) の「ぬ」の文法的説明として適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は

(X) は ・(Y) は 。

- ① 完了の助動詞「ぬ」終止形
- ② 完了の助動詞「ぬ」連体形
- ③ 打ち消しの助動詞「ず」終止形
- ④ 打ち消しの助動詞「ず」連体形
- ⑤ ナ行変格活用動詞の一部

問三 傍線部 (1) 「さりぬべきものやある」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 立ち去ってしまう人はいないだろう
- ② 立ち去らない人はいるだろうか
- ③ 酒に合う食べ物があるはずはない
- ④ 酒に合う食べ物があるだろうか
- ⑤ 最明寺入道にふさわしい杯があるだろうか

問四 傍線部 (2) 「事足りなん」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① お前(平宣時)が酒の相手をしてくれるだけで十分だ。
- ② あなた(最明寺入道)と一緒に酒を飲めれば十分だ。
- ③ すっかり酔ったので、酒はもう十分だ。
- ④ 杯は、平宣時が探してきた質素な小土器で十分だ。
- ⑤ 酒の肴とするのは、小土器に少し付いていた味噌で十分だ。

問五 傍線部(3)「その世にはかくこそ侍りしか」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 37。

- ① 昔は、武士が執権に呼び出されたら、深夜であっても慌てて参上しなければならぬほど張り詰めた緊張感があったのだということ。
- ② 昔は、深夜の急な呼び出しであってもまきちんと身なりを整えることが求められるくらい、武士は礼儀を大事にしていたのだということ。
- ③ 昔は、武士は大人数で酒を飲むことはあまりなく、本当に心を許せるわずかの人とだけ一緒に酒を酌み交わしたものだということ。
- ④ 昔は、執権の立場にある人は常に多忙で休むことも出来ず、真夜中になってようやく酒を数杯飲むくらいだったのだということ。
- ⑤ 昔は、執権の立場にある人ですら少しの味噌肴に酒を飲むだけで満足したように、武士は万事簡素に暮らしていたのだということ。